

カトリック 仙台教区報

No.248 2022年12月4日

発行：カトリック仙台司教区

〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12

Tel. (022)222-7371 Fax. (022)222-7378

発行責任：仙台教区広報委員会

URL <http://sendai.catholic.jp/>

新しい創造へ 向かって

仙台教区司教 ガクタン エドガル



今、私は仙台教区内の各小教区を公式訪問しています。一部の小教区の皆様には、すでにお目にかかりましたが、まだお会いしていない方のほうが多いと思います。これから皆様との出会いを楽しみにしております。その時には皆様方とじっくりお話ししたいと思っています。

ある教会を訪問した折、こんな質問を受けました。「司教様が、叙階式の時におっしゃった『新しい創造』って何ですか。もう少し説明していただけますか」と。

この『新しい創造』は、私の前任者である平賀徹夫司教様が、「新しい創造基本計画」として、2011年5月に、打ち出された言葉です。

「この大災害の中にある今、キリストと結ばれて新しく創造された者である私たち教会は、キリストが抱いたと同じ思いを抱きながら、一日一日、一層の『新しい創造』へと力強く歩みたい。」と。

仙台教区は、この基本計画に従って10年間を歩いて来ました。私は自分に委ねられた奉仕の職を受け取った時、マラソン選手がたすきを掛けて走り、次の選手にこのたすきを手渡すように、平賀司教様からこのことばをたすきのように受け取ったと自覚しています。

振り返って見れば、あの「想定外の未曾有の大震災」と言われた出来事の中で、被災者の方々が失ったものは、とても言葉では言い尽くせないくらい多かったと思います。仙台教区の皆様も復興のお手伝いをしながら、被災者の方々と苦しみをともしながらも、その中で神様が創造の業をなさっているのに気づき、得たものがあつたのではないかと思います。

それぞれの小教区には、同じような新しい創造を個人的にも、共同体としても、体験なさった方もいらっしゃると思います。その体験を、皆様と分かち合っていただけたらと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

「新しい創造」
原稿募集

仙台教区では、平賀司教が打ち出した「新しい創造基本計画」を実践していく中で、さまざまな形で「新しい創造」を経験したはずで、今、もう一度この10年間を振り返りながら、「新しい創造」とは何かと考えることは十分に意味がある事と考えます。仙台教区広報委員会では、皆様方が感じたそれぞれの「新しい創造」についての投稿を募集いたします。

仙台教区の「新しい創造」について



仙台教区第6地区担当司祭
(原町教会在住)

東京教区名誉補佐司教

一般社団法人カリタス南相馬
代表理事

幸田 和生 司教

「新しい創造」という言葉は聖書から来ています。

「見よ、わたしは新しい天と新しい地を創造する。初めからのことを思い起こす者はない。それはだれの心にも上ることはない。代々としえに喜び楽しみ、喜び躍れ。わたしは創造する。見よ、わたしはエルサレムを喜び躍るものとして、その民を喜び楽しむものとして、創造する。」(イザヤ書 65・17-18)

創造というのは、最も根本的な神のみわざです。それに匹敵する決定的な、新しい神のみわざがなされるというのが、この「新しい創造」のメッセージです。仙台教区は震災によって大変な被害を受けましたが、単なる「復旧・復興」をはるかに超えるすばらしいことがこれから起こる、という平賀司教の思いがこの言葉には込められていました。——被災者に寄り添い、被災地域の復興に関わることによって、教会そのものが新たにされる、そのことを通して教会と社会との関わりをもう一度見つめ直す、しかし、それは何か目新しいことをするというのではなく、教会の原点であるイエスのこころと生き方に立ち返ること——平賀司教の胸中にあった思いはこういうことではないか、とわたしは感じました。



一言で言えば、「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」教会になることだと言えるでしょう(ローマ 12・15 参照)。東日本大震災以降、被災地の小教区やカリタスのボランティアベースはその歩みを続けてきました。



原町教会のある福島県南相馬市周辺の地域は、津波で被災した方も多くいらっしゃいますし、原発事故によるさまざまな避難指示の対象にもなり、人口減少を経験しました。信徒の数も減りました。しかしその中で信徒たちは、全国各地から訪れたボランティアと出会い、地域での活動を始めていきました。そしてカリタス原町ベースが生まれ、それは今、カリタス南相馬へと発展しています。コロナ禍にあつて2年以上活動の制約を受けましたが、スタッフとシスターたちが地道に活動を続けています。



この活動に関わるわたしたちの願いは、教会が「地域の人々と一緒に泣いたり、笑ったりしながら生きていくこと」です。そこに「新しい創造」という神のみわざがなされると信じています。震災後、大船渡教会では、それまで教会とつながっていなかったフィリピン人信徒が集うようになり、新しい活気が生まれました。その大船渡の教会とベースで働かれたガクタン司教も同じ思いを持っておられるはずです。

「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」(二コリント 5・17)「割礼の有無は問題ではなく、大切なのは、新しく創造されることです。」(ガラテヤ 6・15)

「新しい創造」とは、結局のところ、神との関係の中で、わたしたち自身がまったく新たにされることでもあります。大切なのは「霊的刷新」なのです。わたしたち皆がもっと深くイエスに結ばれ、もっと深く苦しむ人々と結ばれますように。そこにこそ神は働いてくださいます。

仙台教区のうちぎ

【宣教司牧評議会報告】



宣教司牧評議会が、3年振りに10月10日(祝)司教区センター(元寺小路教会)で開催されました。ガクタン司教が着座してから第1回目の宣教司牧評議会、司教をはじめ各地区からの評議員や担当司祭などの関係者が集まりました。

開会の祈りの後、ガクタン司教より挨拶があり、第2パチカン公会議の決定に触れながら、宣教司牧評議会の役割を説明され、会議がはじまりました。

議題1)の「コロナ禍に於ける仙台教区各地区報告」では、各地区からさまざまな報告がなされました。

コロナ禍故に失ったものとしては、合同ミサ、地区大会、バザーなどさまざまな行事ができなくなり、ミサの参加者が減ってしまった結果として、献金収入や維持費の納入が減ってしまった事、対外的な発信の場を失ってしまったことなどが話されました。

コロナ禍だからこそ気付けた事としては、厳しい中でも、リモートで他の教会のミサにあずかった信者がいた事や、教会のお知らせなどをインターネットを活用して連絡する中で教会から足が遠のいている信者さんからも連絡をもらえるようになった事、コロナ禍のために教会内は飲食禁止となったが司教訪問の際に踊りやダンスなどをしてさまざまな国の信徒が一つになる経験を持つことができた事、ミサがなく聖体拝領だけだった時期に信者の方が「聖書と典礼」を熱心に読むようになった事、メールの連絡がシノドスの意見を集めるために役に立った事など、必ずしもマイナスばかりではなかった事が話されました。また、明るい話題として、高校生の合唱コンクールの練習のためにある高校に

聖堂をお貸しして大変喜ばれた経験がいきいきと語られました。

議題2)の「延期になっていた教区大会(仮称)について」について、小松史朗神父より延期になっていた教区大会(仮称)についてシノドスの歩みと合致させて開催してはどうかと、提案がなされました。

提案に対して、シノドスのアンケートが難解なので焦点を絞るべきという意見や、教区全体の集まりは大切だがどのように行うかに不安があるという意見、さまざまな分科会を行いその頂点としてミサを行った地区大会の経験が活かせるという意見、開催するならコロナ禍の終息の時期にするべきとリモート参加を取り入れてはという意見、小教区から地区、さらに隣の地区へと段階的にするのも一つの方法、イベント的な事は今まで何度もやっているの、そこに行くまでの過程が大切だが1~2年程度でできるようなものではないという意見など、さまざまな意見が出されました。

最後に、ガクタン司教は次のようにまとめられました。準備で疲れてしまう大会は考えてほしいという声が聞こえてきました。大切なのは、小教区や地区などの動きです。教区長としても小教区を訪問した際、外国人が増えていることや、司祭と信徒や信徒間のコミュニケーションに対する声が聞こえてきます。それは、大会というより先に小教区や地区で取りあげていただきたいのです。その上で、全世界のシノドスの結果が出たらそれを受けて教区大会もそこから出発したいと考えています。

上野 隆 (教区広報委員 西仙台教会)

新しいミサ式次第

去る11月27日から、「新しいミサ式次第」が実施されました。まだまだお手元にテキストを手にしなが、少しずつ慣れ始めておられることと思います。この式次第の変更が、単なる言葉の変更ではなく、ミサの祈りの言葉への理解をさらに深め、一言一言注意深く応唱していく機会となることを願っています。

「主は皆さんとともに」の呼びかけに答えて、私たちは「また、あなたとともに」と答えます。「司祭」が「あなた」に変わったわけですが、ここで大切なことは、単に言葉が変わったことではなく、復活したキリストが、私たちと共にいらっしゃることを確認するあいさつである、ということです。目には見えなくとも、そこに集まっている会衆の真ただ中に、そして、司式者の



奉仕の中に、キリストご自身がいてくださることを思い起こすあいさつなのです。ミサの中で繰り返されるこのあいさつを大切にしながら、共にミサをささげてまいりましょう。

仙台教区典礼担当 森田 直樹 神父

仙台聖パウロ書院閉鎖

2022年12月25日で仙台のカテドラルの敷地入口に64年という長い間、信徒の皆様や多くのまだ教会を知らない人々に親しまれてきた聖パウロ書院が閉鎖することになりました。

1957年、当時の仙台教区長の小林有方司教様から「ぜひ仙台教区に書院を開いてほしい」との要請を受けて、その翌年に書院が開かれました。

「最初から、シスターの書院を利用させていただいていたのに、残念です」というお声や「私は、学生時代は、現在の東北電力の建物のところにあった白百合学園に通っていたので、毎日のように前の書院に行っては、シスターとお話をしていたんですよ」とおっしゃる方など、毎日のように書院を閉めることを惜しんでくださる方がおられます。

書院開設当時からしばらくの間は、読書人口も多く、聖書をはじめ、たくさんの本や雑誌な



1993年当時の聖パウロ書院

どが読まれました。しかし、パソコン人口が増えるに連れて、読書人口は減少していきました。そのうちにコロナウイルスが猛威を奮い、教会でのミサや、いろいろな集いなど、一切が無くなりました。こうして、1年が過ぎ、2年3年と時の経過にしたがって書院を訪れる人が少なくなりました。この時期は、ソーシャルネットワークの時代における宣教の在り方を見直す機会ともなりました。

私たちも、書院を通しての宣教活動ができる限り継続してきましたが、残念なことに、私たちの力不足のため、書院を閉鎖せざるを得なくなりました。今まで、皆様のご協力とご支援によって支えられてきたことを感謝申し上げます。今後とも、通信販売やオンラインショップを通して、皆様のご不自由のないように応えてまいりたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

聖パウロ女子修道会 仙台修道院一同



聖パウロ女子修道会のシスターと書院のスタッフ

各地区からのお便り

第1地区より

〈本町教会・浪打教会〉 ガクタン司教様 ご来青

秋晴れの9月25日(日)、わが第1地区の本町・浪打の両教会(青森市)にも、待ち望んだガクタンエドガル司教様をお迎えすることができました。

当日は、本町教会と浪打教会でそれぞれ司教様司式の初ミサが、担当司祭の李錫(イソク)神父様とともに、おごそかにささげられました。李担当神父様が朗読されたルカ福音書は、貧しいザ口のたとえの箇所でした。司教様の説教では、コルカタの聖テレサのお言葉が紹介されました。それは、ある大学生がマザーの話を聞いて、「私たちもコルカタに行きます」と言ったところ、マザーは、「コルカタに来る必要はありません。あなたたちのところに、すぐそばにコルカタがあります。」とお話しされたそうです。皆さんも、貧しいザ口のたとえや、聖テレサのお言葉のように、身近な人々に奉仕することができるよう一緒に祈りしましょうとお話してくださいました。



本町教会

ごミサの後、司教様と信徒との分かちあいの機会をいただきました。司教様のご挨拶では、フランシスコ教皇様から仙台司教への叙階のお恵みをいただいた時のお気持ちを、その時の様子が目に浮かぶように、率直にお話してくださいました。そして、叙階式でご自身が掲げた「新しい創造」という理念について触れられ、今後、2014年に創設された地区制・共同司牧について、皆さんのご意見を伺いながら、必要な見直しを検討していきたいと述べられました。

浪打教会での分かちあいでは、司教紋章の「心も思いも一つに」に込められたお気持ちや、典

礼における聖歌の大切さ(浪打教会では Ama Namin を歌いました)、日本社会での神社やお寺との関わり方など、信徒からの質問に、ユーモアたっぷりに優しくわかりやすく丁寧にお答えくださいました。



浪打教会

ごミサで私たちの李神父様と板垣勤神父様がいつも唱えてくださる「私たちの司教ガクタンエドガル」と、こうして初めて身近に触れ合うことができ、仙台司教区の一員として本当に感謝です。信徒一同、司教様とまたお会いできる機会を楽しみに願っております！

松田 大(浪打教会)

〈弘前教会〉堅信の秘跡にあずかって

僕は10月23日、ガクタン司教様が来られた時、堅信式に臨みました。

小学生の時、初聖体を受けたので、これでイエス様の心に近づいたと満足していました。でも、堅信という更に深く信仰を持つための秘跡があることを知り、板垣神父様と勉強を始めました。神父様は福音の事、神様の事、聖霊の事など、色々と教えてくださいました。聖書の中では、放蕩息子の話が印象的でした。神父様と勉強していくうちに、自分の知らない神様の姿がたくさんある事を知り、やはり堅信をうけたという気持ちが、ずっと強くなりました。

式は、とても緊張しましたが、真剣な気持ちで受けました。そして、なぜかその時いただいた聖体は、とてもおいしく感じました。不思議です。式が終わった後は、記念写真を撮ったり、お祝いのプレゼントをもらいました。司教様のマスクをはずした顔は、とてもやさしかったです。

いい一日だったなと思いました。

阿部 佳大(13歳 弘前教会)

第2地区より

第2地区から、ガクタン司教訪問の歓びの聲がたくさん寄せられています。

〈久慈教会〉

8月13日(土)、司教様の第2地区教会訪問の最初が久慈教会でした。ギャリー、パトリック両神父様、高木健太郎助祭と4人でごミサをささげていただき感激と喜びでいっぱいでした。初めに久慈教会が70周年になる事、60年間ベトレヘム外国宣教会(岩手地区)、10年前から現在の第2地区(青森地区)に編入になった事、4年前に大水害に遭った事等をお話ししました。



歓迎懇談会に入る前に記念撮影をと玄関前に集まっていた時、突然フィリピンの青年たち8人(造船所で働いている)が初めて教会に来て私たちと一緒に楽しく司教様と懇談しました。最後に訪問の感謝と司教様のこれからのご活躍を祈念して終了いたしました。

中野 信男(久慈教会)

〈三沢教会〉

8月14日(日)、ガクタン司教様が三沢教会を訪問され、ミサをささげられました。



午前9時からミサが始まり、その後は聖堂において、三沢教会の生い立ち、ならびに司教様方や信者が一人一人自己紹介をいたしました。くしくも翌8月15日(月)は聖母の被昇天の祭日で、三沢教会の設立記念日でもあり、思い出深い1日となりました。堀 憲一(三沢教会)

〈大湊教会〉

8月14日 年間第20主日 ガクタン エドガル司教様が、パトリック神父様、高木助祭と共に大湊教会にお越しくださいました。私たちはこの日を心待ちにし、ささやかですがお迎えする準備をしておきました。玄関前のマリア像の庭には、3年前に佐藤修神父様が植えてくださったカサブランカが花を咲かせ、司教様を迎えてくれました。八戸塩町教会から、車で2時間の道のりでしたが、お疲れのご様子もなく、早速信徒にお声をかけてくださいました。お目にかかれて緊張がとれました。大湊教会は、大間のマグロ、霊場恐山で知られている本州最北端の地、下北半島のむつ市にあります。1959(昭和29)年ケベック外国宣教会により創立され、ボアベール神父様、今年5月に帰天されたボーリュウ神父様が宣教活動を始められました。当時カトリック信者は誰もいませんでした。神父様方は、大湊の町を毎日散歩され、人々と交流なさったそうです。あれから66年の歳月が流れました。



ガクタン エドガル司教様によるミサは、午後2時から始まり、14人の信徒があずかりました。今日は特別の日。オルガンの伴奏で聖歌を歌うことになりました。二重の喜びでした。司教様、パトリック神父様、高木助祭が並んで祭壇にお立ちになりました。大湊教会は、コロナ禍の中、幸いにも、毎週ミサが開催されており、おいでくださる司祭には感謝の言葉しかありません。いつもの祭壇に、司教様をはじめ、3人の司祭をお招きできると思ってもよらず大きな喜びでした。司教様は、やさしく、時に力強く私たちに語りかけてくださいました。説教は、朝ドラ「ちむどん」の話題から神さまのみことばへと導いてくださり、とてもわかりやすかったです。説教の終わりに、「パウロは言いました。聖霊の実りとは、『愛、喜び、平和、忍耐、寛容、親切、善意、謙譲、誠実、柔和、節制、貞潔です。』私たちの純金が出るまでには、いろいろな絡みを捨てなければならない。イエスの言葉を、いのちの糧として受け取りましょう。家庭にも恵みをいただきましょう。」と導いてくださいました。



ミサ後、30分程、分かち合いの時間を持つことができました。お茶菓子は、リンゴジュースと田名部ばやし。(田名部ばやしは焼き菓子で、今年3年ぶりに開催される夏祭り、田名部まつりに由来しています。)

司教様はフィリピンご出身。「雨季と乾季はありますが、冬はないです」と話されました。そうですね。東北は冬が大変なんです。雪道の運転に、お気を使われたことと思います。今日参加した14人の信徒の方々の紹介をさせていただきました。司教様は、うなずかれ、身を乗り出してお聞きくださり、信徒の思いを受け止めてくださいました。短い時間でしたが、交流できましたことをとてもうれしく思います。ありがとうございました。小さな大湊教会ですが、司祭、第2地区の信徒の方々の協力を仰ぎながら、歩んでまいります。ガクタン エドガル司教様をはじめ皆さまのご健康をお祈り申し上げます。また、平賀名誉司教様にもお礼を申し上げます。これからもお導きくださいませ。

杉野 えり(大湊教会)

〈十和田教会〉

8月20日(土)、ガクタン エドガル司教様が十和田教会にご来訪くださいました。当日仙台より直行とのことでございました。

午後2時からのミサの中で、「東北の地に新しいエルサレムを」と、力強いメッセージをいただきました。ミサ後の信徒館での茶話会では、



私たち信徒一同は司教様のお姿に間近に接し、またご体験をふまえてのさまざまなお話を伺い、喜びと感動の時間をいただきました。

「ガクタン司教様、ぜひまた十和田教会においでくださいますよう」、信徒一同心待ちにしております。
柴田 光子(十和田教会)

〈八戸塩町教会〉

8月中旬より第2地区を訪問されているガクタン司教様は8月21日(日)10時30分から八戸塩町教会でミサをささげてくださいました。

フィリピン、ベトナム、インドネシア出身の信徒の方も多数参加し、典礼も英語、ベトナム語、タガログ語も入るインターナショナルなミサになりました。



司教様は説教で、当日の典礼の集会祈願「国籍や民族の異なる私たちをあなたは今日も神の国の宴に招いてくださいます。」がまさに神の国の実現であると話されました。ミサの後は聖堂がそのまま歓迎会の会場に代わり、子どもたちの歓迎の歌、八戸の民謡「八幡馬」のCDに合わせて皆で踊り、その後、フィリピン人の歌と踊り、ベトナム人の歌など大いに盛り上がり、コロナ禍ではありましたが、楽しいひと時となりました。

なお、4月に助祭に叙階されたばかりの高木助祭も司教様に同行されていたので、共にこのひと時を味わっていただいた事をうれしく思います。
小川 敦子(八戸塩町教会)

〈鮫町教会〉

第2地区公式訪問の最終日程となった8月21日(日)午後2時から、司教様、パトリック神父様、高木助祭様の司式によるごミサがあげられ、22人があずかりました。「司教様の公式訪問」との連絡に、いつもの主日のミサの倍の信徒が集まりました。高齢で、なかなか出てこられない信徒もお孫さんに連れられていらっしやいました。間近に見る司教様の表情や言葉に、力強さとにじみ出る優しさを感じました。

記念撮影の後は信徒館に移動し茶話会が開かれました。工藤美知子副委員長の歓迎の「正調八



戸小唄」の手踊りに始まり、ケベック外国宣教会の神父様によってひらかれた鮫町教会の生い立ちや歴史をお伝えし、自己紹介を行いました。司祭の家におられる鷹嘴神父様の近況も教えていただき、ユーモアあふれる司教様のお話で、終始笑いが絶えない楽しい時間になりました。

同行された高木助祭様の司祭叙階を心待ちにお祈りしています。

齋藤 明（鮫町教会）

第5地区より

第5地区通信（地区内の広報誌）より一部転載させていただきました。

〈古川教会〉

教会献堂59周年記念ミサ開催、聖堂・司祭館の衣替えをしました

古川教会献堂59周年記念ミサ・祝賀会が、6月26日（日）コロナ禍のため内輪でごく控えめに執り行われました。古川教会は、1880年パリ



外国宣教会プロトラン神父による古川地区住民13人の受洗に始まりました。1957年10月川井啓神父が民家を仮教会として地域の福音宣教司牧を再開し、1963年カナダの信徒の協力を得て現在地に建立されました。主日ミサの後の祝賀会には17人が参加しました。

櫻井 清近（古川教会）

〈北仙台教会〉

ガクタン司教様をお招きしました

6月26日（日）、今年3月に仙台司教区教区長に就任されたガクタン エドガル司教様をお招きして、司教ミサをささげました。司教様がいらっしゃることもあり、コロナ禍の中でしたが、多くの信徒が集うミサとなりました。当日は、当教会の関口碧君が司教様から初聖体を受ける貴重な恵みが与えられました。司教ミサでは、青年信徒が司教様の侍者を務め、コロナ対応をしながら、侍者奉仕者を従えた荘厳な司教ミサにあずかることができました。

長山 琢磨（北仙台教会）



第7地区より

3年ぶりの子どもたちの夏のつどい

7月18日（月）海の日に、エメ神父様を講師として迎え「カトリック教会に通う子どもたちのつどい」を3年ぶりに開催しました。5月の堅信式を終えた子どもを含め幼稚園から、小学生、中学生までの子どもたち、保護者、お手伝いの大人と合わせて約30人の参加がありました。

午前中は、エメ神父様による放蕩息子のお話をレンブラントの聖書画を見せながらの説明、2人の息子や父親の考えの中からイエス様のメッセージを伝えました。その後、聖堂での子どもミサに参加、ミサ後にクラリネットの演奏がありました。そして、いよいよ楽しみにしていたカレーライスの昼食。昼食後は、教会の庭でのスイカたたき、子どもたちは、アイマスクをして周りの声援を聞きながらスイカに向かって行きました。午後は伝道館の2階でのピシエ杯ピンポン大会、トーナメント方式で行い、大変盛り上がりました。その後、振り返りと分かち合いをしました。

子どもたちの感想は、①レンブラントの「放蕩息子の帰還」の絵で、息子を抱きしめている父親の手の意味が理解できた。②お昼のカレーライ



スがすごくおいしかった。③スイカたたきやピンポン大会が、とても楽しかった。④今日、ここに来て良かった。⑤コロナ禍でも、こうやってみんなで集まれた事は本当に良かった。⑥楽しく思い出に残る1日でした、来年も、また企画してほしい等などとありました。

駒田 瑞穂（松木町教会）

ベトナム語ミサがささげられました

私たち福島カトリック ベトナム人青年グループは 2020 年 8 月 23 日に設立され、聖アウグスティヌスを守護聖人としています。

8 月 28 日(日)、ベトナム人青年グループの若者たちは、守護聖人とグループの 2 周年を祝いました。ゲン・タン・ヒー神父の司式で、仙台、岩手、青森の青年グループからのメンバーと、福島の青年グループのメンバー約 70 人が野田町教会で行われたミサに出席しました。



11 時からミサが行われ、その前にミサの歌唱練習、青年グループの新代表の選出、聖体礼拝などがありました。ミサの後は、グループの新しい役員の紹介があり、神父様とベトナム人青年グループに感謝し、記念写真を撮りました。

新型コロナウイルスの流行は続いておりますが、第 7 地区担当司祭のエメ神父様、ミサを司式してくださったヒー神父様のご厚意により、ミサが執り行われました。心から感謝申し上げます。そして、私たちのグループがますます強くなり、愛に満ちた団結した青年グループになることを願っています。

ゲン ティ フォン トゥク（野田町教会）

第 7 地区研修会開催

9 月 19 日(月) 10 時～13 時、野田町教会聖堂において第 7 地区研修会が開催されました。参加者 82 人(2 人の神父様、修道院、第 7 地区・第 8 地区各教会)。

〈プログラム〉

- ・ 講話「新しい『ローマミサ典礼書』の実施に向けて」(仙台教区典礼担当 森田直樹神父)
- ・ 講話「聖体の秘跡」(エメ神父)
- ・ 新しい式次第の読み合わせ



11 月 27 日待降節第 1 主日から新しい典礼式文によるミサが始まります。その前に、何が変わり何が変わらないのか・言葉をどのように理解すればよいのか、などを分かりやすく学ぶことができました。質疑応答が活発に行われました。ミサをさらに身近なものにしていくための素晴らしい研修会でした。

三浦 久美子（松木町教会）

Congregacion・ド・ノートルダム修道会 来日 90 周年

福島市花園町にある Congregacion・ド・ノートルダム修道会（CND）花園町修道院は 2022 年 10 月 20 日に来日 90 周年の記念日を迎えました。CND は聖マルグリット・ブルジョワを創立者とする教育修道会で、90 年前のこの日 CND の 5 人のシスターがカナダのモントリオールから 18 日間の汽車と船旅の末に日本の地を踏んだのです。

最初の宣教の拠点を福島市に構え、以来信仰教育や桜の聖母学院での教育活動など 90 年の歩みの中で松木町教会・野田町教会・桑折教会と深い絆ができました。今回コロナ禍のため共に祝うために集まることはできませんでしたが、9 月 11 日(日)の福島市内合同ミサにお祝いと感謝の気持ちを込めました。ミサの参加者には記念のパンフレットと記念品が配られました。

三浦 久美子（松木町教会）

教区の諸活動

平和旬間講演会と派遣のミサ

「平和旬間講演会と派遣のミサ」が、8月17日（水）午後2時から仙台の元寺小路教会において開催されました。主催はカトリック正義と平和仙台協議会、後援はカトリック仙台教区。

今回のテーマは「移住者と難民と共に未来を築く～平和への思いをともに～」と題して、さいたま教区のマリオ山野内倫昭司教が約2時間、映像を交えながら、ご自分の豊かな体験に基づいて講演され、約50人の参加者は、最後まで熱心にメモを取りながら聞いていました。その後、派遣ミサが行われました。



初めに、仙台教区ガクタン エドガル司教が、3月19日に行われたご自身の司教叙階式に、山野内司教がそばにいてくださり、叙階の按手をしてくださったと参加者に紹介し、今回の講演会を引き受けてくださったことに感謝の言葉を述べられ、祈りによってこの講演が始められました。

山野内司教はまず、1964年、ご自分が8歳のとき、当時30代であったご両親と兄弟と共にアルゼンチンに移住したことから語り始め、33年たって、サバティカルで日本に来たこと。今、さいたま教区の司教に叙階され、日本のカトリック司教協議会の中で、日本カトリック難民移住移動者委員会の委員長をしています、と自己紹介をしてくださいました。

現在、その委員会では、船員司牧、タリタムという活動も、自分たちの仕事として奉仕しているとのこと。ベトナム人・ブラジル人・ペルー人・中国人・インドネシア人・フィリピン人など多くの外国人と出会い、その国の言葉で話す必要が出てきます。



さいたま教区司教 マリオ 山野内 倫昭

「難民移住移動者の日」には、教皇フランシスコはメッセージを全世界の人々のために出されます。去年のメッセージでは「もっと広い私たちをつくろう」と呼びかけられました。日本人と他の国の人と壁を立てるのではなく、壁を越えて教会を作っていかなければなりません。

そして、今年、教皇が出されたメッセージの中で、「外国から来た人たちは、宝だよ。宝物として、土着してもらおう。違った文化を受け入れていこう」と呼びかけておられます。今までは、教会の中で外国籍の人がミサに参加しても、縦の関係でした。しかし、国籍を乗り越えて横のつながりになり、教会の新しい力にならなければなりません。



美しい日本は、日本の大きな宝です。教皇は『ラウダート・シ』の中で、「地球と調和して生きなければなりません」、とおっしゃっています。自然環境を保つことを日本から外国に伝えていく使命があることを感じます。

中村桂子さん(理学博士)は、「地球は45億年前に誕生しました。その中で、私たち人類が生きている歴史はそんなに長くありません」と語っておられました。地球では、1億年以上、恐竜が支配していました。その後、地球に氷河期などがあり、今私たちが生きています。

天地万物の創造の業を眺めてみると、たましいがないと、生き物を造れないと思います。神のみ業を感じます。この造られたものの命を奪ってはなりません。私たちだけが生きているではありません。

宇宙飛行士が最初に宇宙から眺めた地球は、美しい青い地球でした。人間が現れて、その地球をどんどん壊しています。地球の命は生きていますが、今の地球のまわりには、人間が宇宙に打ち上げた衛星がゴミと化して、地球を取り囲んでいる状態です。美しい地球ができたのは奇跡です。日本は美しいと、コロナの前には3000万人の観光客が来ました。その誇りを日本人はもっています。しかし、大きなゴミの問題も抱えています。



海の中で、ゴミを食べて魚は死んでいます。このような危機感から、今年の夏、高見三明名誉大司教様は、子どもや青年たちを連れて、五島に行き、海のゴミを拾いました。また、日本には、海だけではなく、大地も手を入れないとジャングルのようになる所もあります。

1997年、予言者のようにアニメ監督の宮崎駿さんが、『となりのトトロ』を作りました。自然とともに生きなければならない、自然を生かさなければならない、ということを伝えました。同じアニメ監督の高畑勲さんは『平成狸合戦ぽんぽこ』で、山を壊さないようにと訴えました。

2015年、教皇フランシスコは、人間が自然と一緒に守らなければ、戦争になっていくと呼びかけて『ラウダート・シ』で、カトリック信者だけでなく、全ての人が地球を我が家として大切にしようと呼びかけました。

休憩をはさんで、具体例として、NHKで紹介された、『私のガリラヤを生きる』という番組を紹介してくださいました。

さいたま教区の終身助祭である長澤正隆さんが、「Amigos アミーゴス」という外国人の医療相談会を開く活動を始め、現在も多様性の文化の中で、種々の無料健康診断会、個別医療支援、新型コロナ対策、家賃支援、食料支援などを多岐にわたってなさっている姿を紹介してくださいました。長澤さんは善きサマリア人が困っている人を見捨てていくことができないように、「自分もそのイエスを見習って生きている」と話しておられます。

日本では、外国籍の人々に、特に、難民申請をしている人々に、非常に厳しい扱いをしています。私たちが外国に行っても、日本人はその国の国籍が受けられますが、日本では外国の人に日本国籍をなかなか交付しようとしません。

復活されたイエスが「ガリラヤに行くように」と弟子たちに言われましたが、長澤さんには、移住者が病気になっても健康保険もないので、病院にいけないで苦しんでいる生活困窮者がいる、ここが自分のガリラヤだと感じ、群馬県太田市で、「アミーゴス」の活動を立ち上げ、外国籍の生活困窮者の人々の医療支援、食料支援などをおこない、人生の三重苦を担っている人々の苦勞の1つでも取ってあげられたらと話しておられます。

イエスの呼びかけに従う長澤さんの生き方は、ボランティア、医師、看護師など多くの人々の協力を得ながら、今日も、「私のガリラヤ」で、イエスとともに、多くの人々の支えとなっています。



ミサの準備が終わり、続いて「平和を求めるミサ」がささげられました。主司式は山野内司教、共同司式はガクタン司教と佐々木博神父でした。

Sr. 長谷川 昌子（教区広報委員）

〈仙台教区青年会から〉

「あなたの名前は何ですか？」

初めまして、私は河面雄樹と申します。さんずいのカワに、ツラと読むオモテという漢字で、コウモと言います。

名前はどうか大事なものらしい。自己紹介の時には、まるでそれが自分の全てであるかのように、毎回説明を求められる。私はいつも返答に窮してしまう。私の名前は一度で理解してもらえない上、わざわざ説明したところで、「ああ、あのややこしい名前ね」としか記憶されないからだ。つまり名前はきっと、非常に重大に個人を代表するものに違いない。

私が参加している炊き出しでは、亡くなられたホームレスの方々の追悼を毎年9月に行う。仏教のしきたりにのっとり、亡くなられた方々へは法名が送られる。追悼の意を込めて、式では亡くなられた方々の生前のお名前（俗名）が読み上げられた。20人程度の方々の名前が読み上げられたところであろうか、耳に入ってきた「俗名不詳」の読み上げ。その「名前」が頭にずっと残り続けている。きっと、名前とは響くものなのだろう。



米川教会の鈴木さんから三経塚について解説していただいた。

南三陸、現在の東和町米川、この近隣地域では二度の大規模切支丹狩りがあった。一度目は伊達政宗没後、延べ300人以上が処刑された。二度目はそれから約百年たった1720年前後、およそ120人の隠れ切支丹が磔にされた。二度目の殉教者たちは、一度目の生き残りの子孫たちであったのだろう。虐殺を生き延びた結果、自らの子孫に十字架を背負わせてしまったという見方もできてしまう。磔刑は当時の日本では、二番目に重い処刑方法である。親を殺した者が受ける罰であった。自分が生き延びた結果、自分の名を引き継ぐ者が槍で刺される光景を見る時、自分だったら何を思うだろう。

私たち、仙台教区青年会は、彼ら殉教者の墓、「三経塚」の整備をした。塚と言いつつも、荒れ



三経塚
参道を整備し、最後に
記念のミサをささげた。

参道整備
倒木や草木が生い茂る
道を進んで行きます。



果てた山中に突然現れる、積み石の上に十字架が立っているだけの打ち捨てられた土地である。下に眠る人の名前すら分らないのだ。積み石は、ご遺体を野犬に食い荒らされないようにと、殉教者の家族が命を危機に晒しつつ積み上げていったものらしい。自分の家族を守るため死を選んだにも関わらず、死後なお家族を危険に晒してしまい、自分の名前すら打ち捨てられる運命を知る時、自分だったら何を思うだろう。名前とは覚悟と忍耐を求めるものなのだろう。

私は今冬洗礼を受け、洗礼名とともに新たに生まれ変わる。名前を付けることの意味を、まだ私は理解し始めたばかりだ。



米川教会訪問



大籠教会訪問

最後に、三経塚訪問・整備を含め、私たち青年会のキャンプを導いてくださった、米川教会の鈴木星史さんとカリタス南三陸の千葉道生さんへ、感謝申し上げます。短い間でしたが、お世話になりました。

「すると彼らは、『その名は何か』と私に問うでしょう。私は何と彼らに言いましょう。」神はモーセに言われた。「私はいる、という者である。」

出エジプト記 3:13-14

河面 雄樹（仙台教区青年会）

司 祭 紹 介

ポール・トー（ケベック外国宣教会）

○生年月日

1978年8月11日

○出 身 国

ケニア

○助祭叙階

2008年10月4日

ナイロビの

グアダルーペ教会

○司祭叙階

2009年5月23日

ケニア ケリチョ教区 ポメット教会



神父様はカトリックのご家庭出身ですか

はい、私は、カトリックの家庭に生まれました。兄弟姉妹は9人おり、男の兄弟は5人、姉妹は4人です。男の子が続いて5人生まれ、私はその3番目に生まれました。ですから、弟が2人、妹が4人ということになります。

司祭になりたいと思われたきっかけは何だったのですか

私が通っていた教会は、ポメット教会といいますが、その教会の下に42の巡回教会を持っていました。私は、教会で侍者をしていたので、主任神父様と一緒に、その42の教会も回っていました。その教会では、1カ月か2カ月に1度しかミサがありませんでした。ですから、皆さんが、どんなにミサを大切にしておられるのかがよくわかりました。そして、ゆるしの秘跡を受けたい人がいても、神父様は「今回はすぐ次の教会にいかなければならないので、時間が無いからこの次にね」と言わざるをえない状況でした。その時の信者さんの悲しそうな顔も忘れることができませんでした。ですから、一言で申し上げるとすれば、ミサとゆるしの秘跡の大切さを痛感したからです、ということになりますね。

ケベック外国宣教会の司祭ですが入会はいつですか

2003年の5月に入りました。

2000年にケベック外国宣教会が、ケニアにやってきました。そして、2001年に養成の修道院が開かれました。私は、ケニア人として最初の入会者です。最初はカナダとケニアの文化の違いにとまどいましたが、神さまが導いてくださいました。

2004年に修練のため、カナダのモントリオールに行き、まず、フランス語を勉強しました。1年間、ここで修練しました。

ケニアでの司祭生活はいかがでしたか

あー、とても忙しい生活でしたよ。1日に3回のミサを信者の皆さまとささげるために、とても忙しかった。しかし、忙しいというより楽しかったですね。

日本にいらっしゃったのは、いつでしたか

2009年12月18日に東京に来ました。まず、東京の日本語学校に、2年半の間通いました。でも、やっと話せるぐらいで、街で話しかけても、通じなかったことが多かったですね。日本語は難しいと思いました。それでは、と英語で話しかけても通じませんでした。



卒業後、仙台に来ました。元寺小路教会に6カ月住み、日本語学校に通いました。それから、青森の弘前教会に行きました。カナダで寒さや雪のある生活を体験していたので、日本の冬には驚きませんでした。

弘前教会は、それまで主任司祭はカナダ人だったので、ケニア人の私が教会に出入りする姿を見て、旅行者だと思っていたようです。それで、ある人は、警察に通報したのです。不審者と思われたのでしょうかね。ちょうどその頃、弘前市の観光協会が、弘前教会のステンドグラスを旅行者に説明している私の写真を撮って、大きなポスターを作り、駅やいろいろな所で貼ってくださっていました。それを見て、私を弘前教会の司祭だとやっと認めてくれました。

このことがあってから、弘前の人々、町と親しくなりました。今もなつかしい大好きな町です。

ケベック外国宣教会の都合で、弘前から、ケニアに帰りました。そこで、6年間、宣教会の志願者や神学生のお世話をする修道院で奉仕していました。任期が終わり、再び日本にやってきました。クリスマスまでは日本語学校に通いますが、その後、福島に異動する予定です。

日本では、生活も便利ですし、セキュリティーもいいし、交通の便もとてもいいので、これからの宣教司牧生活が楽しみです。

■私のフランス聖地巡礼記〈第2回〉

モン・サン・ミシェルとルルド

1月10日ルーアンを後にし、ノルマンディー、ブルターニュ、ロワールと移動し、南下してポルドー、トゥールーズ周辺、地中海沿岸を東へ移動してモンペリエ、リヨン周辺を経て、パリに戻って、私の巡礼は終わる。その中では、モン・サン・ミシェルとルルドという大聖地について、触れておこう。

フランスで第一に見るべき所はどこかと問われたら、私は迷わず、シャルトルを勧める。その大聖堂は、フランス的なものの精髓を最もよく表現しているからである。今回も、地方巡礼の第一にシャルトルを訪ねた。しかし、ジャーナリストの故倉田保雄氏が、フランスで真っ先に见に行くべき所はモン・サン・ミシェルだと書いていたので、モン・サン・ミシェルも訪れたのである。観光の名所として名高いので、俗なものと見誤ってしまうのだが、修道院の中を巡回しているうちに畏怖の念にとらわれ、だんだん考えが変わっていった。この別次元の空間の中に潜む、充満して、果てしなく上昇する「信仰への渴望」に圧倒され驚嘆している自分に気づいたのである。忘我の境界にいるとは、このことであろう。



モン・サン・ミシェル修道院の騎士の間

確かにシャルトルには、教会美術が表現しうる限りの「聖書の信仰」がある。それは「シャルトルの聖書」の評言がふさわしい。ところが、モン・サン・ミシェルに充満する人間の傲岸とも言えるが、しかし魂の美しさでもある「信仰への渴望」も、甲乙つけがたい。

ルルドはフランス最大の聖地である。しかし、私がまず不思議に思ったのは、このルルドの地



旧要塞からルルドの町を臨む

勢である。聖域が現在のように整備される前のルルドは知る由もないが、街の中を歩き、博物館にもなっている旧要塞上から眼下に広がるパノラマを見るにつけても、こんな地勢の土地が日本にあったら、きっと一人の大詩人を生み出したことであろう、と不遜なことが頭に浮かんできて、どこを歩いても、そのことばかりしか考えつかないものである。洞穴の上に立っているロザリオ・バジリカ聖堂では、もちろんミサにあずかった。洞穴前は当然だが、聖堂内にも、礼拝堂や祈りの場がいくつもある。ある小礼拝堂では、静粛に祈りをする人たちが座っている。祈りや瞑想を誘う何かがある。恐らく、私たちはこのルルドにいと、祈りや瞑想の言葉を考える詩人と化するのではないだろうか。いつもとは少し違う言葉で、神さま、イエスさま、マリアさまに、新しい心の歌をささげて祈りたい。詩編作者のように、信仰詩人になった気である。そんな気になるのではないだろうか。祈る聖ベルナデッタの中に、詩人の魂を見たと思うのは、私だけであろうか。

これほどの信仰の遺産を目の当たりにし、教会への信仰・希望・愛を新たにさせられたことは、神の恵みのたまものと思う。この巡礼の旅の機会を与えてくださったフランス政府に謝意を表する。

【お詫び】前号 No.247 の写真の一枚目はサン・ピエール（聖ペトロ）・バジリカ聖堂（アランソン）ではなく、正しくはノートルダム・バジリカ聖堂（アランソン）です。読者の皆様に心よりお詫び申し上げます。

薄葉 健二（いわき教会）

編集後記

教区報が、皆様方の交流の場になればと考えております。広報委員会では、「新しい創造」について皆様方のご経験の投稿を募集することにいたしました。よろしくお願いいたします。

仙台教区広報委員会では、原稿の投稿を募集しております。投稿は随時受け付けていますので、下記のメール宛てに添付ファイルでお送りください。また、メールをお使いでない場合は教区事務所宛てに、手紙でお送りいただいても結構です。

（上野 隆）

sendaikyoukuho@gmail.com

次号発行予定日：4月9日（日） 原稿締め切り：1月末日